

【謹告】

読売日本交響楽団 第609回定期演奏会 出演者・曲目一部変更のお知らせ

本日の読売日本交響楽団 第609回定期演奏会に出演を予定しておりましたクラリネットのダニエル・オッテンザマーとファゴットのソフィー・デルヴォーは、政府の入国制限により来日できず、残念ながら出演できなくなりました。そのため、曲目を一部変更して開催いたします。誠に申し訳ございませんが、何卒ご理解くださいますよう、お願い申し上げます。

公益財団法人 読売日本交響楽団

6/29 Tue.

第609回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.609 / Suntory Hall 19:00

指揮
Principal Conductor
コンサートマスター
Concertmaster

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.5
SEBASTIAN WEIGLE
長原幸太
KOTA NAGAHARA

グルック (ワーグナー編)
GLUCK (arr. WAGNER)

歌劇〈オーリードのイフィジェニー〉序曲 [約10分]-p.14
"Iphigénie en Aulide" Overture

フランツ・シュミット
FRANZ SCHMIDT

歌劇〈ノートル・ダム〉から
間奏曲と謝肉祭の音楽 [約15分] -裏面
Intermezzo and Carnival Music from the Opera "Notre Dame"

[休憩]
[Intermission]

フランツ・シュミット
FRANZ SCHMIDT

交響曲 第4番 八長調 [約45分] -p.16
Symphony No. 4 in C major
I. Allegro molto moderato
- II. Adagio
- III. Molto vivace
- IV. Tempo primo un poco sostenuto

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)



独立行政法人日本芸術文化振興会

協力：アフラック

フランツ・シュミット

歌劇〈ノートル・ダム〉から間奏曲と謝肉祭の音楽

ヴィクトル・ユゴーの小説を原作としたフランツ・シュミット（1874～1939）のオペラ〈ノートル・ダム〉は、1904年から06年にかけて作曲された。文芸創作にも造詣が深かった化学者レオポルト・ヴィルクとシュミットの協業による台本は、ロマの娘エスメラルダを中心とする悲劇へと原作を組み直している。交響曲第1番によってベートーヴェン賞を得た新進作曲家、またウィーン宮廷歌劇場の名チェリストでもあったシュミットの野心作にもかかわらず、時の音楽監督のマーラーは取り上げなかった（若いシュミットはマーラーとの確執にかなり疲弊したようだ）。

着手から10年後（1914年4月）の初演は成功し、現在でもドイツ語圏を中心に時折上演されるが、エスメラルダのライトモチーフ（特定の人物や想念を表す動機）として用いられた、“間奏曲”のエキゾティシズムに彩られた情熱的な旋律こそ、現在もシュミットの名前を最も知らしめているものだろう。ヨハン・シュトラウスの〈ジプシー男爵〉以降、ロマを題材としたオペラはウィーンでは好んで取り上げられたが、ハンガリー系の母のもと現在のブラチスラヴァに生まれたシュミットにとって、それは親しみの湧く音調でもあったろう。

オペラのもとになったのは〈管弦楽伴奏によるピアノのための幻想曲〉（消失）という作品で、実は“間奏曲と謝肉祭の音楽”はこれをもとに作曲され、オペラ着手前の1903年12月6日に初演された。曲は大きく三つの部分から成る。弦のトレモロ、ファンファーレの後の4分の2拍子の足早な音楽は、オペラでは第1幕第2場で謝肉祭の喧騒けんそうが戻ってくる箇所に転用された。続くゆったりとした中間部は、第1幕第2場から第3場にかけての場面転換に流れる間奏曲となった。その後、音楽はテンポを早め4分の3拍子となり、謝肉祭の喧騒が再び現れる。これはオペラの幕が開いた後、祝祭に胸を高鳴らせる群衆を描いた音楽である。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1904～06年（歌劇）／初演：1903年12月6日、ウィーン（間奏曲と謝肉祭の音楽）、1914年4月1日、ウィーン（歌劇）／演奏時間：約15分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器（シンバル、銅鑼）、ハーブ2、弦五部